

甲虫 No. 57
ニュース

COLEOPTERISTS'

NEWS

June, 1982

糞に集まるハネカクシ
ハネカクシ漫歩(7)
渡辺泰明

農業の近代化に伴って機械化・省力化にますます拍車がかかり、その影響を受けて日本の農家では最近まで使役に利用してきた家畜を養育することがほとんどなくなってしまった。また一方では、人間生活にとっての環境問題の重要性が叫ばれ、かつては肥料として都市近郊で盛んに利用されていた下肥や牛・馬糞等が、衛生面あるいは労力面から嫌悪されて、現在ではそれらを使用する例はきわめてまれな状況になっている。

このようなことから、以前は春の訪れとともに都市周辺の近郊農村地帯でマゴソコガネやエンマコガネ等のいわゆる糞虫の飛び交う姿をひんぱんに目撃することができたが、最近ではそれらの昆虫も極端に減少しつつある。ハネカクシの仲間にも糞虫と同じように好んで糞に集まる多くの種が古くから知られているが、これらの種も都市近郊の環境変化に伴う生息場所の消滅でその生存は大きな影響を受けている。

甲虫同好者特に糞虫採集家の中には糞からハネカクシ類を採集した経験を持つ人が多いことと思われるが、それにもかかわらずそれらの採集記録は意外と少ない。今日までの日本産ハネカクシと糞に関係した記録を年代順に示せば下記の通りで、最も古いものは SHARP (1874) によるものと思われる。

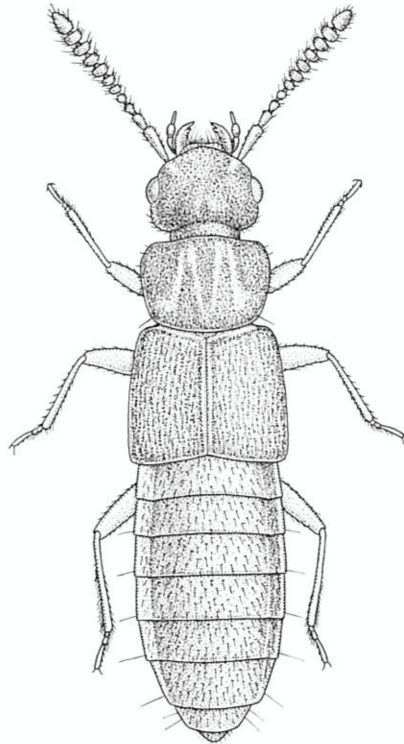
1874, 1889, 1889年にわたって数多くの日本産ハネカクシ類を記載した SHARP は、1874年の論文の中で、糞から採集したハネカクシとしてセスジハネカクシ亜科の3種、ツツハネカクシ亜科の1種、アリ

ガタハネカクシ亜科の2種、それにハネカクシ亜科の3種、合計9種を挙げている。その後、横山桐郎(1931, 1932)、枝松照通(1957)、岡本 巖(1974)、中根猛彦(1975)、田中 馨(1975)、保田信紀(1977)、等によって、牛・馬糞から採集されたハネカクシ類

の記録、あるいは集糞性ハネカクシ類の紹介がなされた。この他、牛・馬糞以外からのものとしては筆者(1972)によってシマリスの堆積した糞から採集されたハネカクシが記録されている。これら現在まで記録された集糞性ハネカクシ類を整理すれば次の通りである。

なお、記録時の名称が現在使われている名称と異なる場合には、記録年に続けて記録時の名称を記した。

1. *Pseudopsis watanabei*
HERMAN スジヒラタハネカクシ
WATANABE (1972, *P. sulcata* NEWMAN; シマリスの糞).
2. *Oxytelus bengalensis*
ERICHSON クロセスジハネカクシ
SHARP (1874, *O. opacifrons* SHARP; in dung); 横山 (1932, *O. opacifrons* SHARP; 牛・馬糞中).
3. *Oxytelus nigriceps* KRAATZ クロズセスジハネカクシ



Anotylus laticornis (SHARP), scale: 0.5mm.

中根 (1975: 動物の糞).

4. *Oxytelus piceus* LINNÉ キバネセスジハネカクシ
SHARP (1874, *O. japonicus* MOTSCHULSKY; in dung); 中根 (1975: 動物の糞); 保田(1977:

- 牛糞).
5. *Anotylus cognatus* (SHARP) セスジハネカクシ
SHARP (1874, *Oxytelus cognatus* : in dung) ;
中根 (1975 : 動物の糞).
 6. *Anotylus crassicornis* (SHARP) ヒゲブトセスジハネカクシ
横山 (1891, *Oxytelus crassicornis* : 馬糞 ; 1932, *Oxytelus crassicornis* : 牛・馬糞).
 7. *Anotylus vicinus* (SHARP) トビイロセスジハネカクシ
横山 (1932, *Oxytelus vicinus* : 牛・馬糞中).
 8. *Platytethus operosus* SHARP クロヒメカワベハネカクシ
保田 (1977 : 牛糞).
 9. *Osorius angustulus* SHARP フトツツハネカクシ
SHARP (1874 : under cow-dung).
 10. *Astenus bicolon* (SHARP) フタホシシリグロハネカクシ
SHARP (1874, *Sunius bicolon* : in dung) ; 中根 (1975 : 動物の糞).
 11. *Charichirus chinensis* (BOHEMANN)
SHARP (1874, *Lithocharis spectabilis* KRAATZ : in dung).
 12. *Megalinus mixtus* (SHARP)
保田 (1977 : 牛糞).
 13. *Philonthus brunnicollis* HOCHHUTH ホソチャバネコガシラハネカクシ
保田 (1977 : 牛糞).
 14. *Philonthus cunctator* SHARP ドウバネコガシラハネカクシ
岡本 (1974 : 牛糞).
 15. *Philonthus quediodes* SHARP
SHARP (1874 : in dung).
 16. *Philonthus spinipes* SHARP オオアカバコガシラハネカクシ
枝松 (1957 : 牛糞).
 17. *Platydracus paganus* (SHARP) アカバハネカクシ
SHARP (1874, *Staphylinus paganus* : under dung).
 18. *Platydracus sharpi* (FAUVEL) カラカネハネカクシ
枝松 (1957, *Staphylinus subaeneus* SHARP : 牛糞中).
 19. *Ontholestes oculus* (SHARP)
SHARP (1874, *Leistrotrophus oculus* : in dung).
 20. *Ontholestes gracilis* (SHARP) サビハネカクシ
中根 (1975 : 動物の糞).
 21. *Heterothops cognatus* SHARP チビツヤムネハネカクシ
保田 (1977 : 牛糞下).

22. *Aleochara curtula* GOEZE ナカアカヒゲブトハネカクシ
中根 (1975 : 糞) ; 田中 (1975 : 獣糞).
23. *Aleochara puberula* KLUG ウスアカヒゲブトハネカクシ
田中 (1975 : 獣糞).
24. *Aleochara parens* SHARP
田中 (1975 : 獣糞).

なお、上記以外に松村 (1931) は Micropeplidae (擬隱翅科) は「馬糞その他の穢物を以て食とす」と記述しているが、筆者はいまだにこの類を糞から採集した経験はなく、また寡聞にしてそのような事例を聞いたこともないのでここでは削除した。

現在まで記録に現われた集糞性のハネカクシは上記の通り24種に過ぎないが、この中で通常は地中にうもれた朽木や腐植の中から採集されるフトツツハネカクシ *Osorius angustulus* SHARP が、牛糞下より得られたという SHARP の記録は興味深い。また、スジヒラタハネカクシ *Pseudopsis watanabei* NEWMAN は、北海道日高山系の幌尻岳北カールの東スロープ(海拔約1,800m)の高山植物の茂みに造巣されたシマリスの巣の入口に堆積していた糞から10頭採集されたが、この種はシマリスの糞以外でも、幌尻山荘附近の森林中の落葉下からも採集された。

数年前、筆者は本学を卒業して現在は静岡県池新田高校に勤務している望月 進教諭より、神奈川県厚木市内および静岡県富士宮市内の二ヶ所に設置した牛糞トラップで得られたハネカクシ類の寄贈を受けたが、それらの同定結果は次ページの表の通りであった。

昆虫類の飛翔活動は天候、温度、湿度等の気象的要因と密接に関係していることが知られており、またこの表はきわめてラフな調査結果の集計なので、これに基づいて集糞性ハネカクシ類を質的あるいは量的に解析することはできないが、厚木市内のトラップの場合では合計9種10頭が得られ、その内セスジハネカクシ類は2種10頭、コガシラハネカクシ類は7種10頭と種数ではコガシラハネカクシ類が圧倒的に多い。これに対して富士宮市内に設置されたトラップの場合では、合計8種34頭が得られたが、その内セスジハネカクシ類が5種34頭、コガシラハネカクシ類は3種9頭と種数においては厚木市内のトラップの場合とは逆に、セスジハネカクシ類が多く得られている。このような現象は恐らくトラップを設置した場所および周辺の環境に関係しているものと想像される。富士宮市内のトラップでは糞の上、中、下の各部分にわけてハネカクシが採集されているが、糞上からはコガシラハネカクシ類の僅か2種2頭が得られたに過ぎず、それに対して糞中からは6種18頭、糞下からは5種23頭が得られ、糞中、糞下による顕著な差異は認められない。なお、個体数では糞中、糞下を通じて *Oxytelus incisus* が20頭と最も多く、得られた総個体数の半数近くに達している。

上記の結果、糞からの採集既記録ハネカクシに今

牛糞に集来したハネカクシ

(数字は個体数)

種名	採集データ		静岡県富士宮市		
	10—13. viii. 1975	神奈川厚木市	10—12. viii. 1976		
			糞上	糞中	糞下
<i>Oxytelus bengalensis</i> CAMERON	7		1	1	
<i>Oxytelus iners</i> WEISE			3		
<i>Oxytelus incisus</i> MOTSCH.			6		14
<i>Anotylus laticornis</i> (SHARP)			2		5
<i>Anotylus latiusculus</i> (KRAATZ)	3		1		1
<i>Philonthus aeneipennis</i> BOH.	1				
<i>Philonthus amicus</i> SHARP	2				
<i>Philonthus rectangulus</i> SHARP	1		1		2
<i>Philonthus rutiligiventris</i> SHARP	1				
<i>Philonthus spinipes</i> SHARP	2				
<i>Philonthus wusthoffi</i> BERNH.	2		1		
<i>Gabronthus sulcifrons</i> (SHARP)	1			5	
合計	20		2	18	23

回新たに記録した集糞性ハネカクシを合わせると35種になるが、今後この種数が増加することは明らかで、セスジハネカクシ属や、ウジを捕食することで知られているヒゲトハネカクシ属をはじめ、腐肉あるいは腐敗物等に見出される他の多くの属に含まれるハネカクシ類が、糞に集来することは経験的に良く知られている。筆者はかつて天城山八丁池周辺でカタモンブチヒゲハネカクシ *Anisolinus pecticornis* SHARP を、日光菅沼周辺ではカタアカマルクビハネカクシ *Tachinus bidens* SHARP を、また北海道虎杖浜ではキベリマルクビハネカクシ *Tachinus mimulus* SHARP をそれぞれ採集したことがある。

集糞性ハネカクシ類の生態に関する報告はきわめて少なく、いまだ不明な点が多い。横山(1914:クロセスジハネカクシなる和名を用いている)は、集糞性ハネカクシとして記録されているクロセスジハネカクシ *Oxytelus nigriceps* の生活史について、本種の卵は5~6粒の卵塊として湿った土中に産卵され、これらは約1週間後に孵化し、孵化した幼虫は約2週間後に土中で蛹化、1週間後には羽化して成虫となって出現すると報告している。従って、本種は約1ヶ月ほどで卵から成虫にまで生育する計算になるが、自然界での世代数は不明である。また、本種の食性に関連して横山は「本種は成虫幼虫共に、有機腐敗物を以て食となすものにして……」と、本種が食腐性であることを指摘している。しかしながら他の集糞性ハネカクシ類が、いわゆる糞虫のように糞自体を摂食するのではなく、糞に飛来する小昆虫や、糞中のそれらの卵・幼虫等を捕食することを

勘案するとセスジハネカクシ類の幼虫および成虫が、腐敗物のみを摂食するの否かは今後の調査で確認を要することと思われる。

参考文献

- 枝松照道 1957. 小倉市及び周辺のハネカクシ類(1). 北九州の昆虫, 4(3): 21—23.
 松村松年 1931. 擬隠翅科, 日本昆虫大図鑑: 130. 刀江書院, 東京.
 中根猛彦 1957. ハネカクシ科, 学研中高生図鑑 昆虫Ⅱ(甲虫): 234, 251, 281, 296, 327, 370.
 岡本 巖 1974. 広島県のハネカクシ(第1報). 広島虫の会々報, (13): 107—109.
 SHARP, D. 1874. Staphylinidae of Japan. *Trans. ent. Soc. London*, 1874: 1—103.
 田中 馨 1975. 山口県の甲虫類(3) ハネカクシ主科, 北九州の昆虫, 21(3): 65—70.
 WATANABE, Y., 1972. Some staphylinid beetles from the Hidaka Mountains in Hokkaido, Japan. *Mem. natn. Sci. Mus. Tokyo*, (5): 111—121.
 保田信紀 1977. 上川町(大雪山・石狩川源流地域)の甲虫類Ⅱ報. 上川町の自然, (2): 31—45.
 横山桐郎 1931. 第十六図. 続日本の甲虫: 118—127. 西ヶ原刊行会, 東京.
 ——— 1932. 隠翅虫科. 日本昆虫図鑑: 730—764. 北隆館, 東京.

(東京農大)

○身延山のナガゴミムシ数種

山梨県身延山で採集したナガゴミムシ類を報告する。全て標高約900米の山稜の広葉樹林内における石起しとベイトトラップで筆者が得たものである。

1. *Pterostichus (Rhadagus) takaosanus* HABU
タカオヒメナガゴミムシ

4♂♂, 3♀♀, 5. ix. 1980 (以下同年): 雄交尾器陰茎の先端片が原産地や丹沢、箱根周辺のものに比べるとより細長い。

2. *P. (Nialoe) fujisanus* TANAKA et SUGA
フジナガゴミムシ

2♂♂, 4♀♀, 5. ix; 22♂♂, 23♀♀, 6. ix: 原産地の富士山以外での記録はこれまでに無かったと思う。富士青木ヶ原のものとは比べて特に目立つ相違は認められない。

3. *P. (Subg. ?) abaciformis* STRANEO ムナビロナガゴミムシ

3♀♀, 6. ix: 本種は中部山岳地帯から東海、琵琶湖西岸まで分布し、身延山は現在までのところ最も東の分布記録になる。

4. *P. (Subg. ?) pachinus* BATES ? ジュンサイオオナガゴミムシ

10♂♂, 17♀♀, 6. ix: 身延山から南方へ30数キロへだてた静岡県富士市からは、*P. suruganus* NAKANE et STRANEO が記載されている。身延山で得たものは、これと同種かごく近縁のものと考えられるので、鹿児島大学の中根猛彦博士に1♂1♀の標本をお送りして両者の異同をおたずねしたところ、身延山産は*suruganus*に似ているが違うようだのご返事をいただいた。*Pachinus*とも同定はされていないが、筆者は身延山のものも関東西部山地や伊豆天城山などで得られているいわゆる“*pachinus*”と同じか同じ種群に属するものと思う。ただ、いまだに*pachinus*の正体そのものが明確ではないので、身延山産も疑問符つきの扱いにした。末尾ながら*P. suruganus*の記載論文*とご教示をいただいた中根猛彦博士に厚くお礼を申し上げます。

*NAKANE, T., (1979), New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions, XXX. Rep. Fac. Sci., Kagoshima Univ. (Earth Sci. & Biol.), (12), 58-60, Figs. 3, 4.

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

○セスジチビハネカクシの大量採集例

セスジチビハネカクシ亜科(Micropeplinae)に含まれる種は、いずれも1~3mmと小型で比較的稀な種である。筆者は1982年4月4日及び11日に、神奈川県厚木市温水^{ぬるみづ}で畑の野菜屑よりセスジチビハネカクシ*Micropeplus fulvus japonicus* SHARPをそれぞれ26頭(15♂♂, 11♀♀)73頭(35♂♂, 38♀♀)と大量に採集したので報告しておく、採集場所は、ネギやハクサイなどが捨てられて腐っている所で、コガシラハネカクシ(*Philonthus*)などがよく見られるべとべとした所ではなく、表層に近い半

分乾いている所に3~7匹ずつ塊^{かたまり}っており、じっとして、しばらくするとともにぞと動きだし、他のハネカクシのような素直さはない。末筆ながら、御教示ならびに御同定いただいた東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明先生に厚く御礼申し上げます。

(千葉県船橋市, 荒川 明)

○メスグロコメツキダマシの記録

メスグロコメツキダマシ *Torigaia bicolor* HISAMATSU et SATO, 1959 (*Entom. Rev. Japan*, 10 (1): 15-17) は、岐阜県飛騨のKAWAIとUTSUEとで採集された5♂♂, 11♀♀の標本に基づいて記載された種類である。本種は分布地として本州(岐阜以南)・四国・九州が知られているが、関東及び東北からの記録はないようである。筆者は従来記録のなかったこれらの地域で採集された本種を所持しているののでここに報告しておく。

1♀, 山梨県小金沢林道, 11. viii. 1979, 新里達也採集; 2♀♀, 福島県湯の花温泉, 27-29. vii. 1975, 伊藤正雄採集。

なお、標本等いつでも御協力いただいている、伊藤正雄・新里達也の両氏に深くお礼申し上げます。

(東京農大, 鈴木 互)

○ミヤマクワガタを石下より採集

クワガタムシ類の越冬に関する報告は筆者の不勉強のため数例しか見ていないが、そのほとんどが樹皮下のものである。筆者は1982年3月6日、ミヤマクワガタの雌を石下より採集したので参考のために記録しておきたい。神奈川県三浦市三戸海岸で、波打際から15m位の砂地の石下より得たもので、当日は霧雨が降り肌寒い日であったが手に取るとすぐに脚を動かした。この個体は体長26mmしかなく、全体に体型が貧弱な矮小型であった。「神奈川県昆虫調査報告書」(1981)によれば、神奈川県のみヤマクワガタは、横浜、三浦半島のような低地から丹沢の山岳地帯の頂上まで広く分布しているとのことであり、少ないものではないようであるが、石下での越冬という報告を今まで見たことがないので報告した。(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○ヒラノクロテントウダマシの記録

ヒラノクロテントウダマシ *Endomychus hiranoi* SASAJI は佐々治寛之博士により1978年に記載された種類であるが、佐々治博士の「日本産テントウムシ目科概説(4)」(1980, 甲虫ニュース, No. 52)によれば既知産地は箱根及び軽井沢である。筆者は東京都及び山梨県で本種を採集しているのので記録しておきたい。

東京都青梅市御岳山, 65頭, 27. viii. 1979 (酒井香採集), 69頭, 26. viii. 1980. 両方共朽ちて表皮部分のはがれていた同じスギより得た。

山梨県南都留郡大洞山, 4頭, 3. ix. 1981. キノコ

のついている朽木をピーティングして採集した。資料を提供していただいた酒井香氏にお礼申し上げます。(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○ダイセツオサムシの模式標本

ダイセツオサムシ *Carabus (Eucarabus) kurilensis daisetsuzanus* Kôno, 1936 は河野広道博士によって北海道大雪山の小泉岳産 5 ♂♂ 1 ♀ (6~18. vii. 1926) 鳥帽子岳産 1 ♂ (18. vii. 1926), および赤岳産 1 ♂ (18. vii. 1926), 合計 7 ♂♂ 1 ♀ (共に河野博士採集) に基づいて記載されたものであるが、原記載 (Biogeographica, 1 (2), p. 78, pl. 10, fig. 5) には模式標本の指定がない。従って、これら 7 ♂♂ 1 ♀ の標本はすべて総模式標本 (syntypes) であって、この中の 1 頭を後模式標本 (lectotype) に指定することができる。

国立科学博物館に所蔵されている故河野広道博士の蒐集品 (河野コレクション) の中にあるダイセツオサムシは次の 4 頭である。

1. ♂, Mt. Daisetsu, H. Kôno (Koizumidake, 16. vii. 1926), *Carabus kurilensis daisetsuzanus*, Type ♂.
2. ♂, Mt. Daisetsu, H. Kôno (Koizumidake, 18. vii. 1926), Paratype, *C. culirensis daisetsuzanus* Kôno ♂.
3. ♂, Hokkaido, H. Kôno (大雪山, 5. vii. 1927), *Carabus kurilensis* LAP. f. *daisetsuzanus* ♂, det. H. Kôno.
4. ♀, Mt. Daisetsu, H. Kôno (vii. 1926), *Carabus kurilensis* LAP. f. *daisetsuzanus* ♀, det. H. Kôno.

原記載に用いられた 7 ♂♂ 1 ♀ は上記の通り、すべて 16~18. vii. 1926, に河野博士自身によって大雪山頂上で採集されたものである。従って、3 の 1 ♂ は 5. vii. 1927 に採集されているので模式標本に加えることはできない。1 および 2 の 2 ♂♂ は河野博士自身によって Type および Paratype に指定されているうちに、そのデータも原記載と矛盾しないので、共に syntypes の中の 1 つと見做してよいであろう。4 はラベルの表は 1 および 2 と同様であるが裏面の記入は vii. 1926 だけで詳しい産地と日が欠落している。また同定ラベルの記入は 3 と同様で *Carabus kurilensis* LAP. *daisetsuzanus* となっていて、1, 2 の同定ラベルの記入とは異っており、そのうえ模式標本の指定がない。従って、これが原記載に用いられた唯一の♀と同一であると断定できない。

以上の理由により、国立科学博物館に所蔵されている、ダイセツオサムシの原記載に用いられた総模式標本は上記の 1 および 2 の 2 ♂♂ と推定される。残余の 4 頭の所在は恐らく北海道大学農学部ではないかと推定しているが、まだ確めてはいない。

なお、後模式標本 (lectotype) を定めておいた方が便利であるので、1 の標本、すなわち河野博士自身が「Type」と指定した 1 ♂ を lectotype にここで指定しておきたい。河野博士は他に paratype を指定しておられるので type とは holotype の意味で

あると推定してもよいであろう。面白いことに、河野博士の同定ラベルは 1 と 2 は *Carabus kurilensis daisetsuzanus* となっていて亜種と認めているのに、3 と 4 には *Carabus kurilensis* LAP. f. *daisetsuzanus* となっていて、型と認め亜種とは認めていないことである。このことから、河野博士は最初には中千島産の原亜種 *kurilensis* LAPOUGE, 1913 とははっきり異なる別亜種と考えておられたが、後にはその差異が軽微であることに気がつき、亜種として区別するの躊躇されたのではないかと推定される。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○富士山におけるニセリソゴカミキリの記録

ニセリソゴカミキリ *Obera mixta* BATES, 1873 は、本州・四国・九州・種子島に分布する種であるが、露木 (1975, さやばね, (1) : 1~15; 1976, 同(2) : 13~16; 1977, 同, (3) : 55~58) によれば、富士山周辺では記録されていない。

筆者は、富士山において本種を下記のように採集しているので報告する。

1 ♂, 山梨県青木ヶ原 (標高約 1100m), 19. viii. 1981, 高須明子採集。

報告にあたって、ご教示を賜った露木繁雄氏に御礼申しあげる。(東京都品川区, 高須明子)

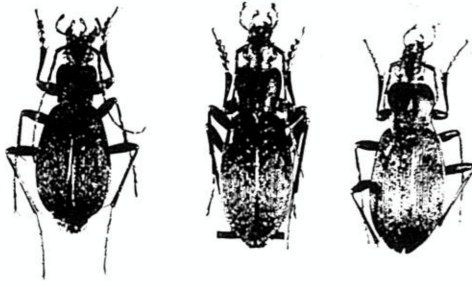
○秋田県およびその周辺におけるホソヒメクロオサムシとヒメクロオサムシの分布について

ホソヒメクロオサムシ *Carabus harmandi* は中部山地帯においては亜高山帯に分布域を持つ比較的稀なオサムシとして知られている¹⁾。またヒメクロオサムシ *Carabus opaculus* は北海道においては普遍的に産するが、本州においてはその生息域が東北部の高山山頂部附近に限られて報告されており、その南限を福島県吾妻山姥原としている²⁾。従来秋田県から両種の報告は知らず、ここに両種の県内を中心とした採集記録を報ずると共に、両種の分布域についても言及したい。

現在まで県内で採集し得たホソヒメクロオサムシは、*C. harmandi nakamurai*, ヒメクロオサムシは、*C. opaculus shirahatai*, に該当すると思われるが、採集個体数が少なく、変異もあるので断定はさげたい。以下県内における両種の採集地点と標高を記す。

ホソヒメクロオサムシ

- a) 森吉町女木内, 200m, 側溝より 1 ♂, 筆者採集。
- b) 森吉町森吉山, 1200m~山頂 (1454m), ジュース空カン中 1 ♂, 他上翅 4 枚 (第 1 図) 筆者採集;
- c) 田沢湖町田沢湖高原, 700m, 側溝より 1 ♂, ♀;
- d) 皆瀬村秣岳, 700m~山頂 (1424m), 側溝, トラップにて, 加納彦一, 筆者採集;
- e) 河辺町岩見三内, 120m, オサ掘り, 土中より 1 ♂ (第 2 図), 藤岡昌介採集;
- f) 矢島町鳥海山, 700m, 側溝より, 1 ♀, 藤岡昌介採集;
- g) 岩手県須川温泉~栗駒山山頂 (1628m), トラップにて 3 ♂♂ 6 ♀♀, 筆者採集。



第1図

第2図

第3図



第4図

○ ホソヒメクロオサムシ
● ヒメクロオサムシ

gを加えると7地点から採集できたが外に以下の地点からの報告がある。

h) 岩手県和賀村鷲合森^{2) 6) 7)}; i) 秋田県田沢湖町駒ヶ岳山頂((1637m)³⁾; j) 山形県鳥海山⁴⁾; k) 山形県月山⁵⁾; l) 岩手県八幡平茶臼岳⁶⁾; m) 宮城県蔵王町刈田峠⁶⁾。
ヒメクロオサムシ

1) 鹿角市八幡平, 1400m~頂上(1613m), 測溝,

石起しにて10♂15♀, 藤岡昌介, 筆者採集; 2) 栗駒山山頂部, トラップにて1♀, 他に上翅2枚, (第3図) 筆者採集; 3) 山形県鳥海山, 1600m~山頂(2230m), 空カン中より, 筆者採集; 4) 岩手県早池峰山小田越, 1200m, 1♂1♀, 田中誠採集。

以上の外に以下の地点からの報告がある。

5) 青森県岩木山山頂部⁶⁾, 6) 青森県八甲田大岳⁶⁾, 7) 青森県西津軽郡白神岳⁶⁾, 8) 山形, 宮城県蔵王山⁶⁾, 9) 山形県月山⁵⁾, 10) 岩手県焼石岳⁶⁾。

以上の地点を図4に示した。現佐のところ筆者は青森県からのホソヒメクロオサムシの報告を知らず, その他早池峰山を除いてはヒメクロオサムシの産する地点ではその下部にホソヒメクロオサムシを産することが知られる。しかし山頂部において両者が混生している栗駒山や八幡平の例もあり, 森吉山, 駒ヶ岳などのようにホソヒメクロオサムシのみ産する地点もある。このように両種は秋田周辺においては複雑にすみ分けており, 従来いわれてきたヒメクロオサムシがホソヒメクロオサムシの上部に生息するといった単純なものではないと考える。しかもホソヒメクロオサムシは県内では200m未満の低地から1600mまで採集されており, この点で亜高山性の種ではないと考えられる。

一方ヒメクロオサムシは高山部(東北北部では, 1500m程度でも高山帯に相当する)からの報告が多いが, 早池峰山の如く, 1200m附近でも少なくない事(田中氏私信)から, 東北北部におけるベニヒカゲ, アラコガネコメツキのように純高山性昆虫とはいえないのではないかと考える。

終りに本報文を記するに当り, 標本等を賜った加納彦一氏, 藤岡昌介氏, 田中誠氏, それに発表をすすめられた笠原須磨生氏に対し深謝する。

引用文献

- 1) 京都府立大学学術報告(1962): 日本アルプス常念岳に於ける歩行虫類の分布(高山の昆虫の研究II), 3, (4), pp. 21~34.
- 2) Ishikawa, R. (1968): Three new subspecies of Japanese Carabina (Coleoptera, Carabidae), Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, 11, (1), pp 263~267.
- 3) 京浜昆虫同好会(1970): INSECT MAGAZINE, (76).
- 4) 桜井俊一(1974): 鳥海山のオサムシ, 甲虫ニュース, (17, 18).
- 5) 毛利隆昭・上野晶博(1972): 月山の動植物調査報告, 早稲田生物, No. 17.
- 6) 環境庁(1979): 日本の重要な昆虫類(東北編)・7) 正木清(1970): 岩手県牛形山でアルマン採集, OSAMUSHI, 2, (3), p.5.

(秋田県秋田市, 佐藤福男)

Dr. Jadson Linsley GRESSITT (1914~1982)

林 匡 夫

昭和57年4月26日(月)午後4時44分、中国広東省広州市から広西壮族自治区桂林市に向う中国民航のトライデントジェット旅客機が墜落(一説にはテロリストの爆弾破裂によるという)し、乗客・乗員110名全員が遭難死亡したというニュースが、同28日の各新聞に報じられたが、その中に多数の香港籍中国人観光客に混って2名の米国人乗客があった旨の記事があり、続報でこの米国人乗客名こそ、グレンツ博士夫妻に外ならないことが明らかになり、我々に大きなショックを与えた。私の知友、元 California Academy of Sciences の Mr. LEECH から4月28日付の San Francisco Chronicle に大きく報じられたこの事故の記事を送られ、アメリカにおける反響も日本以上に大きいことを知った。グレンツ博士夫妻は、所用をかね5月上旬日本を訪れる予定であったと聞いている。同博士とは、戦後まもなく中国広東市にあった米国系ミッションの嶺南大学(Lingnan University)に勤務されていた頃から文通し、共産軍の広東市開放後中国を離れてハワイに移られたが、お目にかかったのは昭和26(1951)年頃、香川大学に中條道夫博士を尋ねられた後、拙宅を訪問された時が最初である。昭和55(1980)年8月京都で第16回国際昆虫学会議が開催された際、御夫妻と久しぶりで一夕歓談出来たのが今から想えば最後の機会となってしまった。

グレンツ氏はキリスト教の宣教師であった父君の任地、日本の仙台で、1914年誕生した。カリフォルニア大学の元農科大学長、現名誉教授のリンズレイ博士とは「いとこ」同士という事で、グレンツ氏のクリスチャンネームに、リンズレイの名のあるのも由なしとしない。米国カリフォルニア州の名門スタンフォード大学在学中、1932年に18才で沖縄・台湾に採集旅行を行い、その採集品の1部に基き、翌1933年(19才)処女論文“New Longicorns from the Japan Empire”(1933, The Pan-Pacific Entomologists, 9(4): 163-170)を公表したが、得意の日本語を活用、外人として始めて新種に和名を与えるなど新しい試みを示した。1935年スタンフォード大学を卒業、カリフォルニア大学(パークレイ)大学院に進むと共に次々と日本・台湾・中国の天牛類の報告を公表、1938年卒業と共に、中国広東市の嶺南大学に就職、大活躍をされた。

1945年母校カリフォルニア大学に学位請求論文“The Tortoise Beetles of China (Chrysomelidae: Cassidinae)”(この論文は後、1952, Proc. Calif. Acad. Sci., 4, 27(17): 433-592, pls. 27-36, 1 text-fig., 4 maps として発表された)を提出、Doctor of Philosophy の学位を得た。

前述したように中国の政変によって共産軍が広東市を開放した頃、グレンツ博士から贈られた郵便物にはられた切手(写真)は共産政府発行の切手の上に赤字でインフレーション的な金額の印刷されたものであったことを思い出す。この嶺南大学時代にやはり中国内のミッションで活動されていたマーガレット夫人と知り合い結婚されているが、多数の天牛や金花虫の報告と共にまとまったものとして広東省(1939)、海南島(1940)、琉球諸島(1951)、支那(1951)、ニューギニア・南太平洋(1951-52)などの天牛相の報告を続々公表されている。グレンツ博士も1949年中華人民共和国への体制の変革から米国に一たん引きあげ、改めてハワイのビジョップ博物館に活躍の本拠を移された。博士の活動はこのハワイ時代に大きく開花したとって過言でない。



先ず米国の National Foundation の援助による Insects of Micronesia シリーズ(1954-)の刊行をあげてよいだろう。そのために各国の多数の学者が米国の国立財団や海軍からの研究費の援助によって Bishop Museum で働き、Micronesia を訪れた。博士自身もその中で天牛(1956)や金花虫(1955)科を担当執筆している。やがて自身の研究も広がり、特に生物地理学的にスケールの大きな研究が展開されて行く。かねてニューギニアを始め多くの南太平洋諸島を調査された結果を踏まえて、先ずWallace線の意義について昆虫を材料とする限り否定的な意見を提出、生物地理学的境界線の東洋熱帯区の範囲を大きく東に移しニューギニアを経て濠州北部から南太平洋諸島を含むものとしている(1956, Some distribution patterns of Pacific Island faunae; Systematic Zoology, 5(1): 11-32, 47, 9 maps), (Wallace's Line and insect distribution, 15th International Congress of Zoology, Sect. 1, Paper 10: 1-3)。そして大洋島への昆虫の分散は大部分は風によるもの、次に海流又は海鳥の足や翅に附着して行われるものと思ふ旨の仮説を提出して、その証拠を得るために、米海軍や沿岸警備隊の艦船のマストに多数のネットをつけて太平洋を航行してもらって、風による分布を確める実験を繰り返し、後には航空機による同様の実験を行っている(1957-58, Origin of the Oceanic Insect Fauna; Proc. Hawaiian Acad. Sci. 33rd annual meeting)。それ等の延長・発展は Pacific Insects (1959-)の刊行、各国の学者の Bishop Museum への招へい、

太平洋各地域への学術調査の実施が活発に行われたことに連なる。この一環として我国の少壮昆虫学者多数が次々とまねかれ、現在それぞれ大成されていることも忘れる訳に行かないグレンシット博士の偉大な功績である。

博士は世界有数の大島であり、アジアとオーストラリア両大陸要素の交流から見て最も調査の不十分なニューギニアに非常な関心を示し、多くの報告を続いで刊行した。(1956 ('58), *New Guinea and Insect Distribution, Proc. 10th International Congress of Entomology, 1: 767—773*) (1959, *Longicorn Beetles from New Guinea, 1 (Cerambyc.) Pacific Ins. 1 (1): 59—171*); (+J. J. H. SZENT-IVANY, 1968, *Bibliography of New Guinea Entomology, 657 pp.*)。そして後年ニューギニアのワウに Wau Ecology Institute を開設してこれを主宰することとなる。

Pacific Insects に続いて Pacific Insects Monograph のシリーズが計画出版されたが、この中でもグレンシット博士は積極且つ精力的に大部の研究を続出版している。(1) 中国及び朝鮮の金花虫科(十木元新作博士)(1961, 1963); (2) 太平洋と南極の昆虫の動物地理学の諸問題(1961); (7) キャンベル島の昆虫(1964); (23) 亜南極昆虫学: 特にサウスジョージアとヘード島について(1970); (24) ラオスの天牛類(+Dr. S. BREUNING)(1970); (25) 南極及び極南昆虫学の進歩(1971); (27) ニューゼーランド以南オクランド其他の島嶼の昆虫学(1971)等と続々学界に前人未踏の分野を開拓する研究を送り出した。グレンシット博士自身が(2)の論文のイラストラクトに示しているように、“太平洋諸島の昆虫類の分布と種の分化の研究はその島嶼的環境の中における、その島々の歴史の、分散の状態及び種の進化の知識への1つの重要な鍵となるであろう”というねらいで行われ、先に述べたように多くの艦船及び航空機にネットをつけてのトラップによる空中の昆虫の採集の実績を踏まえて“大洋島に住みついている昆虫のタイプとその船と航空機によるトラッピングの結果の相関はその種の原因から、広い大洋をこえての分散が、元来気流によるものであることを強く示唆している”と述べている。

しかし70年度からかねがね極めて多額の援助を得ていた米国の資金援助が著しく減少し、財政的に同博士はかなり苦しい立場におかれることになる。従来行って来た世界各国の専門家をハワイに集めて、太平洋各地の学術調査を行うことなどが不可能となり、ビショップ博物館の昆虫の仕事の内容も縮少せざるを得ず、Pacific Insects の発行にも可成りの努力を要することとなる。更に自身が開発経営してきたニューギニアのワウの研究施設の経営にも苦心されることとなって来る。

グレンシット博士夫妻から年賀状がわりに毎年1度友人達に送られた同博士夫妻や彼等の子供たちの過去一年の消息を誌した手紙にも、年を追って運営の

むつかしさを率直にうたえる内容が増している。しかしそんな状況にも少しも負けることなく明るい積極的な内容のたのしい手紙で、私なども毎年頂いて読むのを楽しみにしていたものである。

最近ではワウの研究所で、美しいニューギニアの自然を紹介する小冊子のシリーズを刊行され始めたが、(1)蛙、(2)甲虫、(3)メラネシアのビジン(土語)における生物学用語の手引き、(4)北東ニューギニアの原産陸生哺乳類の手引き、(5)パプアニューギニアにおける生態学と自然保護、(6)ユミオルゲタライキムデワイ(木を大切に)が刊行された。当初2ヶ年報告、1971—1973、第2次2ヶ年報告、1974—1975等が出版され、(2)、(5)は博士が、(6)は夫妻が執筆し、更にカインダイ山へのガイドは博士の筆に夫人の美しい植物の図や表が加えられている。

又一方同博士は、ハワイ特産の不思議な形態をもつ、特産のトラカミキリ類の研究に energy を集中して1969年から1978年にかけて多数の報告を行われたが、最後のものはそのまとめともいべきものであった(1978: *Evolution of the endemic Hawaiian Cerambycidae; Pacific Ins., 18(3/4): 137—167*)。

そのエネルギーな研究活動はあくなき自然への深い興味と洞察に支えられ、どこまで発展するか予測を許さない発展を示し、大いにこれからの成果を世界の同学者は鶴首待望していた所であるが、今回の不測の事故によって中断のやむなきに到ったことは、返す返すも残念極まりないことであった。博士自身にとってもさぞ心のこりであったことと思ひ残念でならない。この様なスケールの大きい広い範囲の学問的領域をその優れたフロンティアスピリットと行動力で積極的に開拓し得る学者は今後果して再び出現するか否か、はなはだ心もとない次第である。ともあれ太平洋をめぐる自然の探求に少年時代からの夢を大きく実現することの出来た博士は考え方によれば大変幸せな方であったかも知れない。ここに知友グレンシット博士夫妻の御冥福を心よりお祈りしてこの小文を終りたい。

(大阪市・城南短期大学教授)

後記: 今回はグレンシット博士の逝去という思わぬ出来事のため、予定を変更して林匡夫博士に追悼文を記して頂きました。この号からやっと今年度号になりますが、今年中に続いて3号を完結するつもりでいます。ご期待とご援助をお願いいたします。

(黒沢良彦)

甲虫談話会

会費(一カ年)2000円、次号は8月31日発行予定。
投稿切は7月31日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電話(364)2311、振替東京0-60664